

渔夫冒险

宫原晃一郎

(翻译 萩田丽子)

从前，在日本九州一个偏僻的渔村里，住着两个渔夫，一个叫仙藏，另外一个叫次郎作。

有一天，他们俩像往常一样乘着小船出海捕鱼，突然被大风刮到了一个很远的地方。幸运的是，船没有沉，他们俩也都没有受伤，只是漂流到了一座小岛上。

他们俩又累又饿，决定找个人家讨一些吃的东西，就向小岛的深处走去。突然，他们在路边看见一片西瓜地。奇怪的是西瓜大得不得了，就像巨大的酒桶。他们从来没见过这么大的西瓜。

两个人吓了一跳，但是肚子饿得厉害，没有多想，就用小刀在西瓜上挖了个眼儿，切下红红的瓜瓤，狼吞虎咽地吃起来。

西瓜很好吃，他们吃啊，吃啊，不知不觉就钻到西瓜里面了。吃饱之后，就乐乐呵呵地唱起歌来。

更让人惊讶的是，种西瓜的人也是大的不得了，两个奈良大佛加起来也没有他们一个人高。

一个巨人带着孙子来到西瓜地里，发现西瓜有一个小洞，而且从里面传来好听的歌声。

“这是怎么回事？”巨人和孙子往洞里一瞅，看见坐在里面的仙藏和次郎作。

巨人说：“不好，西瓜生虫子了。”

孙子说：“真的有虫子！可是它们的叫声真好听呀！我们把这两个小东西养起来吧！”

孙子一边说，一边把指头伸进洞里，把仙藏和次郎作捏出来，放

在手心上。

仙藏和次郎作大吃一惊，吓得缩作一团。孙子好像玩蚂蚱和蜻蜓一样，捏捏他们的头，又摸摸他们的背。

“喂，虫子！唱歌，快唱歌呀！”

仙藏和次郎作吓得说不出话来，可是一停止唱歌，那个小孙子就捏他们的头，所以只好拼命地唱。

爷爷说：“真是聪明的虫子。它们听得懂我们的话。咱们带回家好好养吧，可不要把它们捏碎。

就这样，仙藏和次郎作被巨人和他的孙子当做虫子带回了家。

孙子想：这两只虫子又聪明又会唱歌，今天晚上我要抱着它们睡觉。于是把仙藏和次郎作放进了被窝里。

两个渔夫束手无策，只能任凭那个孩子摆弄。

又胆小又笨的次郎作哭哭啼啼起来：“怎么办呀？我们会不会被他们吃掉呢？”

仙藏也担心地说：“嗯，我想不会吧。只要我们好好唱歌，他们就会高兴的……”

“可是，如果我们一直被他们关在这儿，回不了家，可怎么办呢？”

“是呀，我们俩都上有老，下有小，只要活着，就一定得想办法逃回去！”

“好！事不宜迟，今天晚上就逃吧！”

“嗯，等他们睡着以后，我们偷偷地跑到海岸边，我们的船停在那里，只要能上船就有办法，以后的事儿再说！”

逃跑的计划就这样决定了。

不一会儿，巨人的孙子呼噜呼噜地打着鼾睡着了。

他的鼾声好像大风吹入山洞里一样响。仙藏和次郎作手牵着手，蹑手蹑脚地走着。

“次郎作，要小心啊！”

“我知道。不过这里太黑了，连方向都分不清。”

“咱们是在被窝里，当然黑了。管他东南西北呢，先跑出去再说。”

他们俩拼命地逃。可因为他们是朝着被脚的方向跑，一直跑到了天亮也没有跑出去。

巨人的孙子早早地起来去看虫子，却发现他们已经无影无踪，急得大喊。

“爷爷，爷爷！糟了！我的西瓜虫不见了！”说着，拳头一样大的泪珠簌簌地掉了下来。

“别哭，别哭。爷爷帮你找找。他们一定还在家里的什么地方。”

巨人爷爷掀起被子一看，两只“虫子”吓得跌跌撞撞，在被子下面东躲西藏。对仙藏和次郎作来说，巨人的被子简直太大了。他们俩累得气喘吁吁，觉得至少已经跑出一里多远。

巨人爷爷把他们捏到手心里，让孙子看：“你看，你看，他们在这儿呢！别哭了！”

“你们还在呀！太好了！我告诉你们，以后可千万不要再乱跑了，免得我睡觉翻身把你们压死。”

巨人的孙子又高兴起来了。这次他决定把他们放在一个挖掉了瓢的西瓜里养。

这下子，仙藏和次郎作可跑不了了。他们没有办法，只能靠吃西瓜活命，服从孙子的命令唱歌，过着无聊的日子。

有一天，巨人爷爷对他的孙子说：“把你的虫子借给爷爷用一天，好吗？”

“好啊，可你要让他们做什么呢？”

“我的鼻毛太长了，鼻屎也有不少。你的虫子那么能干，我想让他们给我修剪一下鼻毛，打扫打扫鼻屎。”

“好吧，那就借给你吧。”

于是，仙藏和次郎作硬着头皮带着镰刀和锄头钻进了巨人爷爷的鼻孔里。

仙藏对次郎作说：

“这下可糟了。以前咱们俩一直在一起，现在却要分开，钻进两个鼻孔，以后也许再也见不着了。”

次郎作吃惊地问他：

“为什么？”

“你想，如果巨人使劲儿吸一口气，咱们就可能被他吸进肚子里面。”

“那可不得了啦！有没有什么好办法可以避免这场灾难呢？”

“我想没有。看来我们能做的只是在活着的时候，互相报个平安。这样吧，咱俩隔一会儿就用镰刀和锄头敲打一下鼻子的‘墙壁’，就说明还活着呢。”

“好，就这么办吧！”

仙藏和次郎作提心吊胆地钻到了巨人的鼻孔里。他们先用镰刀把灌木一样的鼻毛修剪整齐，又用锄头把鼻屎打扫干净，还不时敲打一下鼻子的“墙壁”互报平安。

这的确是一个非常危险的工作，因为巨人不断地呼吸，气息像大风刮过树林一样呼啸着。一不小心，就真的会像仙藏说的那样，被“大风”吸到肚子里或者被刮倒。但他们还是努力地打扫到了鼻孔中间。

可是，越往深处走，鼻孔就变得越暗越热。又胆小又笨的次郎作越来越不安，割了一根鼻毛就发信号，挖了一块鼻屎又发信号。

他们越往深处走，巨人的鼻子越发痒。巨人想打喷嚏，便使劲吸了一口气。结果仙藏和次郎作一下子就被他的气息刮倒了。

仙藏大声警告次郎作不要总发信号。可是因为次郎作听不到，还是不断地敲打“墙壁”，吓得仙藏一直捏着一把汗。

也许是次郎作敲打墙壁太用力，巨人终于仰起脸大声打了一个嚏

嚏。

巨人的噴嚏简直能刮走一座大山。

仙藏和次郎作好像树叶一样被风高高地刮到天上。过了好久，扑通一声落到地上，晕过去了。

两人清醒过来一看，原来是被刮回了日本。



(日本語原文) **漁師の冒険** 宮原晃一郎

いつのころでしたか、九州の果のある海岸に、仙藏と次郎作という二人の漁師がおりました。

ある日二人はいつものとおり小さな舟に乗って沖へ漁に出ますと大風が吹いて、とおくへ流されました。けれども運よく舟も沈まず、けがもしないで、とある島へ流れつきました。

二人はおなかですいているものですから、早く人家のあるところへ出て、御飯をたべさしてもらおうと、奥の方へあるいて参りますと、そこに畑があつて、大きなすいかがなっているのを見付けました。ところがその西瓜が仙藏も次郎作もまだ見たこともないほどのものでした。それは酒をこしらえるときの、大樽ほどもありました。

二人は大へんびっくりしました。けれども何しろ、もう一足も歩けぬ程お腹がすいているときですから、すぐにもつて来た小刀で、それに穴をあけて、中の赤い肉を切りとつて食べ始めました。

するとあまりにおいしいので、だんだん食べていくうちに、とうとう体とも西瓜の中に入ってしまった。そしてお腹が十分にみちたので、いい気持になって、二人とも歌を歌っておりました。

こちらはその大きな西瓜を植えた人たちです。その人たちは奈良の大仏を二つも合わせたほどの巨人おおびとでありました。その巨人が、孫をつれて、畑を見に来ますと、自分の西瓜に穴があいて、そのなかから美しい

声で歌が聞えました。

「おや変だぞ。」と、巨人は二人の入っている西瓜に目をつけて申しました、「これは西瓜に虫がついた。困ったことをした。」

「ほんとに虫がついたね、おじいさん、でもいい声の虫だから、取って帰って、飼いましょう。」

孫の巨人はそう言いながら、指を穴に入れて、仙蔵と次郎作とをつまみだし、手のひらにのせました。

驚いたのは二人です。ただもう恐ろしさに小さく縮み上っていると、孫の巨人は、ちょうど私共が、バッタかトンボをおもちゃにするように、二人の頭をつまんでみたり背中を指でなでてみたりするのです。

「こらこら虫よ、」と、孫は二人が歌を止めたので、申しました。「歌え、歌え」

二人は恐ろしいので、声もろくに出ません。けれども歌わないと孫が太い指で頭をつまんで振り回しますから仕方がありません。一生懸命に歌いました。

「本当に利口な虫だな。」と、おじいさんの巨人は申しました。

「ちゃんとこっちの言うことが分るんだ。大事にして飼って置こうね。手荒いことをして、つまみつぶしちやいけないよ。」

仙蔵と次郎作は、巨人達から、とうとう虫と見られて、その家につれていかれました。孫の巨人は、これは本当に利口で美しい声の虫だから、今晚は抱いてねるのだと、二人を寢床の中に入れました。

困ったのは二人の漁師でした。

「仙蔵」と、弱虫で少々馬鹿な次郎作は泣き声を出して申しました。「どうしたらいいだろうかね。しまいには食われてしまやしないかしら？」

「そうだね。」と、仙蔵も心配そうに答えました。「まさかそんなこともあるまい。俺たちがいい声で歌ってやりさえすれば喜んでいいるのだから……」

「でもいつまでもここにつかまっていた日にゃ、もう日本へ帰ることもできないが、どうかして逃げ出す工夫もないだろうか？」

「そうだな、俺もそのことを考えているんだ。お前だって俺だって家にゃ親兄弟もあれば、女房や子供もあるんだから、生きているからにゃ一度は帰りたいものだ。」

「じゃ今夜逃げよう。」

「そうだ、巨人達が寝てから、こっそりと海岸へ逃げて行こう。まだ乗って来た舟もあるから、あれで沖へ出てしまえば、それからさきは又どうにか考えをつけよう。」

二人はすつかり相談をきめました。

ほどなく孫の巨人がグウー、ゴーと、まるで大きな岩穴へ嵐が吹き入るようないびきをかいて眠ってしまいましたので、二人はこっそりと手を引き合って、逃げ出しました。

「次郎作、しつかりしろよ！」

「よし、合点だ！でも暗くて方角が知れない。」

「ふとんの中だから暗いんだ。どっちにでも走って、早く端に出ることだ。」

二人は一生懸命に走り出しました。けれどもまちがって裾の方へ走ったとみえて、なかなか明るいところへ出ません。そのうちにとうとう夜があけてしまいました。

一番がけに眼をさましたのは、孫の巨人です。すぐに虫はどこにいますかと、入れて置いた蒲団の中を見ますけれども、二匹とも影も形もありません。「ああ、おじいさん、大変だよ、大変だよ、大事な大事な西瓜の虫がいなくなっちゃった。」

孫は眼からげんこつのような大きな涙をパラパラと流して、泣き出しました。

するとおじいさんの巨人は、「よしよし泣くんじゃない、泣くんじゃな

い。どこかそこいらにはい出しているだろうから、わしが捜してやる。」と、言って、蒲団をすっかり取りのけますと、一里も先に逃げのびたはずの二人は、まだ裾のほうにうろうろしておりました。大変広い蒲団であったと見えます。

「それ見なさい。」と、おじいさんの巨人はすぐに二人をつかまえて、手のひらにのせて、孫の巨人の顔の前へ差し出しました。「この通りいたじゃないか？もう泣きなさんなよ。」

「ああ、いたいた。有難い有り難い。もうお前たち、むやみと歩き回るのはではないよ。もしわしが寝返りでもした時、押しつぶされるといけないからね。」と、いいきげんになった孫の巨人は、今度は肉を削った西瓜の中に二人を入れて、飼って置くことにしました。

二人はもう逃げようとて逃げるわけにはまいりません。仕方なく御飯の代りに西瓜を食べて、孫から言いつけられるとおりに歌を歌い、味気ない日を送っておりました。

ある日のことでした。おじいさんの巨人は、孫に申しました。――

「これこれ、孫や、わしにお前の虫を貸してくれまいか。」

「おじいさん、貸してあげてもいいですが、何をなさるんですか？」

「あのね、あの虫は大変賢いだろう。だからわしの鼻の穴に沢山毛が生えて、垢もついているから、毛をかったり垢を掃除したりさせるのだよ。」

「じゃ貸しましょう。」

そこで仙蔵と次郎作は、鎌と鍬とを持たされて、おじいさんの巨人の鼻の中へ入ることにされました。そのとき仙蔵は次郎作にむかって申しました。――「さあいよいよ危いときが来た。今までは二人一緒だったが今度は鼻の穴に別々に入るのだ。だからもしかするとそれっきりで、もう会えなくなるかも知れないぜ。」次郎作はびっくりして聞きかえしました。――

「どうして？」

「それはね、巨人がもしか強く内の方へ息を吸い込んだら、そのはずみ

に俺達は、鼻の孔から腸の中へ落ちていかないとも限らないからだ。」

「それは困ったな。どうかしてそんなことにならない工夫はないかしら。」

「ないよ……だがね、せめてはお互いにまだ無事であるつてことを生きている間は知らせ合おうじゃないかえ。だからこうするんだ。時々巨人の鼻の障子を鎌か鍬でたたいて合図をするんだ。」

「うん、それがよかろう。じゃそうしよう。」

二人はこう約束して、おそろおそろ鼻の入口から入って、先づ鎌で藪のように生えた鼻毛を刈り、鍬で鼻の垢を掘りしては、鼻の障子を叩いて、無事であることを互いに知らせ合ひました。けれどもその仕事は危いものでした。

なぜかといえば、巨人がたえず息を呼吸しているのが、鼻の毛をまるで強い風が林を吹くように音を立てて動かして通り、うっかりすると、仙蔵が気遣つたとおりに吸い込まれたり、又吹き倒されそうになったりするからでした。

しかしそれでも鼻の孔の半分までは無事に掃除をすましてきました。ただこの辺から暗いことも段々暗くなり、その上に暑くなって来ました。弱虫でそそっかしやの次郎作は、独りで働いているのがいよいよ心細くなって、一本の鼻毛を刈っては合図に鼻の障子をたたき、一つ垢をほじっては、又合図をしました。

けれども巨人の方では奥に二人が入るにつれて、こそばゆくなって、くさみをしそうになりますのをこらえこらえ致しますので、中の二人は時々その強い息に吹きたおされました。

それに気のついた仙蔵は、次郎作が合図をする度に、危いから、そう度々するんじゃないと、大声に叫んで注意しますがけれども、聞えないと見え、矢張り合図をしてよこしますから、ハラハラしています。

そのうちどうしたはづみでしたか、次郎作が合図に鼻の障子を一つ叩き

ますと、その叩きようが少しひどかったとみえ、巨人はとうとうたまらず、ハックションと、上を向いて、大きな山でもとばされるようなくさみをしました。

空に高く、風が木の葉を吹きあげたように持っていかれた二人は、しばらくしてからどしんと地面におとされて、気絶しました。正気にかえってみると、二人とも日本まで吹きとばされて、帰りついたのです。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編集室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。